
紫の遺伝子

銀時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫の遺伝子

【Nコード】

N9563Z

【作者名】

銀時計

【あらすじ】

JS事件が終結してから数年後、管理局はその事件の主犯ジェイ・スカリエッティに実の息子がいるという事実を掴む。危険性があるかの調査に管理局が乗り出し始めた頃、その息子はゆっくりと世界の裏で暗躍をしていた。

プロローグ（前書き）

初めて書くので面白いか分かりませんがどうぞよろしくお願いします。

ブローグ

「何か欲しいものはあるか？」

「じゃあ、最新ゲーム機」

そんな会話をしている親子がいた。

夕暮れの何の舗装もされてない道路を歩きながら父親は再び子どもに尋ねる。

「夕食は何かいい？」

「カレーライス」

今時の子どもがよく答える模範的な解答を繰り返す我が子を微笑ましそうに見続ける男は何とも変わった格好をしていた。

スーツの上に学者が着ていそうなイメージがある白衣を纏い、その手には何故か野球グローブがはめられていた。

一方の子どもは白い半ズボンに青い半袖、手にはサッカーボールが置いてあった。

周りには二人以外の人の気配がまったくなかった。

川、森、広場、並木などはあるが人工物はまったくなかった。

いや、二人が向かう先には大きな古びた洋館があった。

「君は私のことが嫌いかな？」

「その前に実の息子に対して『君』っていわないで欲しいんだけど。後、嫌いじゃなくて好き」

素っ気なく返ってきた答えには不思議と愛情のようなものが含まれているようだった。

それを感じとったのか父親は嬉しそうな顔をした。

「次の仕事が終わったら父さんと一緒に暮らそう。もう、たまにしか会えないような暮らしは終わるんだ」

「本当？」

子どもは初めて興味を示したのかまじまじと父親の顔を見た。

「ああ、本当だ」

それを聞くと何も言わず少年はにっこりと微笑んだ。少年というよりは少女のような顔をしていたためかその笑顔はとても可愛らしかった。

それから数年後少年の父親——ジェイル・スカリエツィは管理局に捕まった。

そして、それから程なくして彼は獄中で謎の死を迎えた。

自殺か殺害か、死因が分からなかったがその事件は自殺として片付けられた。

そして、管理局がその歴史的犯罪者に血の繋がった子供がいるという事実気づくのはさらに数年後のことだった。

プロローグ（後書き）

次回はなるべく早く投稿しようと思います。

第一話 紫の遺伝子（前書き）

書き上げたので投稿します。

第一話 紫の遺伝子

ジェイル・スカリエッティに子供がいる。

管理局内においてはちょっとした噂になっていた。

管理局——正式名称時空管理局。

未知のテクノロジー、ロストログアを回収して保管したり、管理世界と呼ばれる彼らの管轄の平和を維持したり、犯罪者を検挙するのが主な仕事な組織だ。

そして、その組織内で今、ささやかれている噂が現在でも史上最大のテロと呼ばれる事件を起こしたジェイル・スカリエッティには子供がいるというものだった。

だが、所詮は噂。

はつきり言って都市伝説のような迷信めいたものだった。

出所も分からなければ、事実かどうかも不確か。

誰もがそんなことはないと思いつながら冗談、世間話、暇潰し、ちよつとした話題などに使っていた。出生不明の世紀の大犯罪者に息子がいるというのは思ひのほか、話の種になるようだった。

そんな数ヶ月も経てば忘れられるような噂に危機感を抱いている人物達がいた。

それはかつてJS事件を解決まで導いた部隊、機動六課とその関係者達であった。

次元の海の中に本拠地を構える通称海、もしくは空と呼ばれる本局の廊下を今、歩いている彼女もつい一週間程前にその噂を聞き不安を抱き出していた。

その彼女を後ろから呼び止める声が聞こえた。

「あ、フェイトちゃん」

「あれ、なのは？」

なのはと呼ばれた彼女が振りかえるとそこにはロングの金髪をした同年代の女性が立っていた。

この二人も以前は機動六課に所属していたのだが、J S 事件が終了してから機動六課は解散して、彼女達も別々の部署に転属となった。

それでも長い付き合いの彼女達は今でも交友を続けている。(とうかほぼ同棲状態なのだが)

そんな二人はいつものように楽しそうに会話を始めたが、やがてフェイトの方から話を切り出した。

「フェイトちゃん……あの噂聞いた？」

「それってジェイル・スカリエッティの？」

「うん」

二人は機動六課の構成員時代他の仲間とも力を合わせスカリエッティを逮捕したという過去がある。

そんな経歴を持つ二人だけにそういった噂には他の管理局員よりも敏感に反応してしまう。

さらに、二人にはその噂の心当たりがあった。

ナンバーズ。

ジェイル・スカリエッティが作った戦闘機人で構成されていて、メンバーの十二人は姉妹のような関係を築き、それぞれが『IS』と呼ばれる先天固有技能を持っている組織だった。

だが、事件後はメンバーの約半数が改心して、社会復帰をしていた。

残りのメンバーは死亡したり、スカリエッティと同じく軌道拘置所に収容された。

現在は解散しているその組織で問題なのはそのメンバー達をスカリエッティは『娘達』と呼んでいたことだ

もしかしたら、そのことが原因で今、噂が広がっているのではないか？

現在、彼女達は更正して、それぞれの道を歩き出している。

だが、そのことが世間に露見したらとんでもない混乱が起こるだろう。

なにせ、史上最大と言われたテロ事件のメンバーが五年も経たないうちに釈放されていることになる。

それゆえに、そのことを知っているものも管理局関係者の中でもないほんの一握りだ。

「やっぱり子供っていうのはシスターズのことだよね？」

「うん、私もそう思う。一体、どこから噂が立ち始めたんだろう？」

話し合いながら歩き続ける二人には『本当に血の繋がった子供がいる』という考えはまったくなかった。

＊

「おい、スカリエッティ」

かつての大犯罪者のファミリーネームを軽々しく呼ぶ声が聞こえた。

声の主はファミレスの前で腕を振っていた。

車が次々に走りぬける道路の横断歩道の信号が青に変わるのと同じ時にその彼に向かって呼ばれた相手が駆け寄ってきた。

「先輩、そっちの方で呼ばないでくださいって前から言ってるじゃないですか」

そう言いながらもあまり怒ってない様子の彼はどうやら口で言うほど気にしていないようだ。

そんな二人のやりとりを見た通行人が見てふとささやきあっていた。

「なあ、スカリエッティってあの犯罪者と同じ名字だよな？」

「そんなの偶然だろ。それより、あのスカリエッティって子、かなり可愛くないか？ 俺マジで好みだわ」

「あ、俺も俺も」

そんな会話を知ってか知らずか二人は店内に向かいながら楽しげ

に会話を始めた。

「なあ、スカリエッティ。今、カップルなら価格が安くなるキャンペーンやってるからカップルのふりしない？」

「カップルって……男と男ですよ。見えるやけないじゃないですか」

その会話に割り込むように店員が話しかけてきた。

「あ、お客様。今、カップルなら価格が安くなるキャンペーンを実施していますので、あちらのカップル専用席にどうぞ！」

それを聞いて先輩と言われた男が一言。

「な」

それを聞いてスカリエッティと言われた明らかに女にしか見えない男が一言

「え」

そのまま、流される形で二人はカップル専用席に向かった。

第一話 紫の遺伝子（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

第二話 強盗は三人（前書き）

何とか出来ました

第二話 強盗は三人

「シルバーブルームの仕業か……」

「何がだ？」

そんな会話をしている二人の少年がファミレス店内にいた。しかも、カップル専用席という特殊な場所にだ。

両方とも男なのに。

「じゃあ、きつとブラック將軍の仕業です」

「だから何だそれ？」

机の上に置かれたハンバーグやライスを食べながら噛み合わない会話を続ける二人は目立つというわけではないが独特な雰囲気と見た目を持っていた。

不幸そうに愚痴る彼は黒いミディアムの髪に低い身長と少女のような可愛らしい童顔。

保護欲を駆り立てるような小動物を思わせる外見と弱気そうに見える雰囲気を持ち合わせていた。

そして、その少年の言うことに質問をする方の少年は逆に背が高く、低い方の少年と比較すると大体、三十センチぐらいの差がある。そして、目を引くのが腰まで届くぐらいの水色の長髪ともう一人の少年と同じような女顔。

だが、こちらの場合可愛らしいというよりは美しいという具合であり、ギリギリ女というよりは美形の男子に見える顔立ちだった。最も年上系の女子に見えないこともないが。クールそうに見える

外見に反して、意外と軽い口調で背が低い方の少年に話しかける。

「シルバールームとかブラック將軍ってなんだよ？」

「知らないんですか先輩？」

「ああ、全然知らない」

「いいですか先輩、シルバールームというのはブラック將軍が初めて刺客として選んだ円盤生物なんですよ」

「さらに分からなくなっただうえに新しい疑問が生まれたわ。円盤生物ってなんだよ……」

そんな会話が怠惰なく続くかと思いきやそれは意外な幕切れをみせた。

「金を出せ！」

唐突にドラマでしか聞かないような必要最低限の言葉が店内に響き渡った。

二人を含めた店内の客全員が声の発信源に振り向くとそこには顔をバイザーで隠し、バリアジャケットで武装した三人の男達がいた。この三人が強盗というのは明白だった。

瞬間、店内に悲鳴が木霊し、店から出ようとする客達がいたが男達の一人の威嚇射撃によってすぐに静かになった。

その間にももう二人の男はデバイスの銃をちらつかせ、現金を催促する。

強盗というのは素早さが重要になる。

時間をかけすぎると外に事情を察知されたり、警察（この世界の場合管理局員だが）が来たり、包囲されたりするからだ。

銀行強盗ならいざ知らず、この手の飲食店なら約十分たらずで犯行を終了させることができるので、ある程度の余裕を犯人達は持っているはずで客達から見ても犯人達はスムーズに犯行を行っているように見えるのだが、犯人達は実際のところかなり焦っていた。

（くそっ！ あいつら何でこないんだ！？）

威嚇射撃を行った主犯格でもある男は窓の外の様子を見ながら苛立っていた。

実は本来ならこの計画、五人で行うものだった。

つまり今の三人以外にも二人仲間がいるはずなのだ。

店内に侵入して現金を略奪する三人、外で見張りをする二人と役割が分担されていた。

この店に入る直前までは確かに仲間の二人がいたのだが、威嚇射撃をした際、窓の外を見ると待機していた二人が忽然と姿を消していたことに気づいた。

なぜ、このタイミングで二人が消えたのかが分からないがここまでできたからには引き下がるわけにはいかない。

「金の準備は出来たか？」

「ああ、バッチリだ！」

「さっさとずらかろうぜ！」

間髪入れずに返ってきた答えに安堵し、慌ただしく三人は店から出ていった。

しばらく店内にいる全員が呆然としていたが段々と落ち着きを取

り戻してきたらしく、ガヤガヤとうるさい音が店内に広まった。

そんな店内の中で一人、他と比べると異質な考えをしている人物がいた。

（もしかして、あの二人、今の三人の仲間だったのかな？）

スカリエッティはそんなことを隣の席に座る先輩の今の犯罪者についての考えを聞きながら、呑気そうにジュースを飲んで考えていた。

第二話 強盗は三人（後書き）

感想やご意見をお待ちしています。

第三話 後片付け

遠く輝く夜空の星に僕らの願いが届くとき

銀河連邦はるかに越えて光の国からやってくる

今だ！

「変身！ 北斗と南へ戦えへ戦えへ、ウルトラマンA、僕らのAへ」

「いや、長い！」

そんなやたら行数をかけるやり取りをする二人がいた。
一人はスカリエッティ。もう一人は先輩（名前不詳）である。

「それにしても酷い目に合ったな。まさか、強盗が入ってくるとはな……」

「確かに。僕らって結構、運が悪いですね」

夕方どきの街並みを愚痴りながら歩く二人はカップルに見えなく

もないのだが、実際は同性同士である。

自分達の不運を嘆くも、それほど気にしてないようで会話は弾んでいた。

すると、はっとしたように先輩と呼ばれる男が腕時計を確認する。

「やべ！もう少しで電車来る！？ スカリエッティ悪いけど俺、先行くわ！」

「僕はもう少しすることがあるから気にしないでいいですよ。先輩、さようなら」

「ああ、じゃあな」

そう言うと一緒に駅に向かって彼は走っていった。

それを見送ると近くの雑居ビル同士の間にある路地にスカリエッティは悠々と入っていった。

*

「まったく強盗なんてやるんじゃないよ、この忙しいときに……」

そう文句を言いながら、先ほど発生した強盗に関する資料を対策本部で目に通しているのはゲンヤ・ナカジマという男だ。

対策本部といってもファミレスでレジから現金を奪ったぐらいなのでたいしたものではないが形式的に設立されていた。

最近、彼の身近でスカリエッティに子供がいるという噂が広まって

いて、気を使っているというのに追い討ちをかけるかのような事態に内心、ため息をついていた。
スカリエッティの子供——それは、今の自分の娘達のことだろうと彼は考えていた。

「たく……一体どこから漏れたんだ？」

だが、そんな悩みを打ち消すかのように対策室に一人の管理局員が飛び込んできた。

「ゲンヤさん、大変です！」

部下の動揺にただならぬことを感じとり、神妙な顔つきでゲンヤは聞き返した。

「落ち着け、一体どうした？」

「そ、それが……」

その反応に対策室にいた他の捜査員全員が注目するなかようやく彼は続きの言葉を紡いだ。

「は、犯人は全員死亡しました！」

その言葉に対策室は飲み込まれ、しばらくの間誰も声を出せなかった。

＊

「えっと……これで全部かな？」

心配そうに大きめのバッグの中身を確認する人物が街中の誰も気づかないような路地裏にいた。

それは先ほど、先輩と別れたスカリエッティだった。

「僕って、おっちょこちよいだから、意外なところでミスするんですよね。本当に困った、困った」

誰に話しているか分からない独り言を呟く。この裏路地には彼と先ほどファミレスに強盗しに入った男達が持っていたバッグがあるだけだった。

「あ、そうだ。何か言い残すことあります？ リクエストによっては叶えてあげますよ？」

そう言い上を見上げる。

その視線の先には宙に浮く人影が三つあった。

見れば、それはまぎれもなくファミレスに入ってきた強盗の三人だった。

三人は体をどこから出てきたのか見当もつかない、いくつもの鎖で縛られ身動きを取れない状態にされていた。

「まあ、あなた達も結構悪ですね。今回の強盗以外にも殺人五

件、麻薬取引十二件、強制売春七件他にもまだまだ、判明してないことしてるんでしょ？」

彼の問いかけに男達は一人も答えない。
鎖で口を塞がれているから当然だ。

「で？リクエストは……あ、そうか話せないんでしたっけ？じゃあ、とりあえず――」

そこで彼はにこやかに笑い友人にジュースを購入する小銭をせびるかのように言った。

「僕のために死んでくれないかなあ？」

必死に鎖から抜け出そうとしていた男達の顔が驚愕に移り変わるが、すぐに表情はまた変わった。

死の瞬間を感じとった凄惨な表情に。

それを満足気に眺めると彼はバッグを肩にかけて歩き出した。
同時に鎖が解け三人が落下してきた。

そこには鎖も現金もスカリエッティも存在せず、強盗の死体が三つ転がっているだけだった。

それから、しばらくして強盗を捜査していた管理局員によってこの死体は発見された。

刺殺されていたという。

第三話 地下迷宮

「スウー……ハアー……スウー……ハアー……」

静かな寝息が明かりの無い暗闇に僅かながらに聞こえる。

寝息をたてている人物——スカリエッティは枕に頭を乗せ、体に布団を被せるという基本的な就寝スタイルで睡眠をとっていた。

しかし、そのスタイルとは別に彼が寝ている場所は異質な所だった。

彼が現在いるところはミッドチルダの地上からは目視することのできない地面の下——地下道だった。

この地下道は下水道とも繋がっていて、全てを合わせると相当な距離の地下迷宮と化している。

そんな地下に数ある通路の中の一つを進むと行き止まりの壁に突き当たる。

それ事態は他の通路でもよくあるのだが、実はというとその壁だけ扉のように開閉する仕組みになっている。

その奥にワンルームほどの空間があった。そこには一人用の布団、本棚と収容されている本、机、インスタント食品などといったものが置いてあった。

ここを彼は秘密のラボと名称している。

ちなみに魔術工房とも呼んでいる。

そんな子供の好奇心や興味心をそその名前の場所の主は今、こうして寝ているわけのだが——

ピピピピピピッ！

アナログタイプの目覚まし時計が鳴りだした。一応、防音空間の部屋なので外には漏れないのだがそれでもこんな非日常的な空間で

家庭的な空間で聞くような音を聞くのは何とも言えない滑稽な気持ちになる。

すぐにスカリエッティは起きて、目覚まし時計を止めたがまだ寝ぼけているのか少しうとうとしている。

そんな中、机の上から人の声が聞こえてきた。

「——だ。繰り返す犯人グループは五人、うち現場にいた三人は犯行現場から五キロほど先の裏路地で死亡しているのが発見された。その時、現金の入ったバッグはなかったため残りの二人が持ち逃したと考えられ——」

それを聞いた瞬間、素早く布団から飛び出し、その音声に耳を傾ける。

机の上に置いてあるのは一般管理局員に支給される基本的なデバイスで彼のような民間人とは無縁のものである。

にも関わらず、彼は所持しているどころか真剣に、いや、真剣というよりは買ったばかりの玩具を見るような表情で見つめている。

しばらく無線を聞いていたがふと何かを思うようにデバイスの横をチラッと見る。そこにはデバイスと同じく机の上に置かれているバッグがあった。

そのバッグは紛れもなくあの三人組が持っていたものだった。

「さてと……取り敢えず、魔術工房でも改築しようかな……」

誰に言うわけでもない独り言を呟きながら彼は机の中から救急箱サイズの木箱を取り出す。中には試験官やビーカー、ろ紙といった科学的な道具から怪しい色の液体やかなり古めかしい羊皮紙といった魔術的なものまでがあった。

（やっぱりリンカーコア無しはつらいね……こつも一からやらな
いといけないし……）

その思いとは裏腹に表情に悲観的なものはなく、それどころか楽しんでるようにすら思える微笑みを浮かべていた。

彼は今までの人生、リンカーコア無しという短所を徹底的に利用して生きてきた。

魔術関連の事件が発生するとリンカーコア無しは疑われにくいのだ。最も疑われにくいというだけで必ず疑われないわけでもないのだが。

（要塞の改築って意外と楽しいんだよね、まるで、自分が組織する軍隊に武器を与えたり、戦艦や戦闘機を購入して強化するみたいで）

彼からすれば趣味と実用を兼ねた両得の行為なためか純粹に楽しそうだった。

無線から入ってくる情報をBGM代わりにして彼の作業は長く続いた。

第五話 寝ている間に事態は悪くなった

（今、何時かな……）

相変わらず物音一つしない地下空間でスカリエッティはまたも寝ていた。起きた時に関節の節々が所々、痛んだので原因について考えてみたが単なる寝違いで全身が痛くなるわけではないので、おそらく布団だろうという結論にたどり着いた。

彼が持ち込んだ荷物は手作業で運んだということもあり、あまり大きな物を部屋に置いてない。部屋の家具の中で一番重い机を運ぶさい距離や大きさ、地下に潜るまでの苦労も関係して、三日かかっている。

そのことから、目立つのを防ぐため大きな物はなるべく持ち込んでいないので、それほど重くないが大きくかさばってしまう布団は薄い掛け布団と枕しか持ち込んでいないのだ。

その結果、コンクリートが敷き布団代わりになるので必然的に体の節々が痛くなるというのが彼の見解である。

（何とか目立たないように敷き布団を持ち込みたいな……薄い掛け布団を何回かに分けて持ち込んで敷き布団代わりにしようかな？）

そんな代用案を考えながらスカリエッティは机の上に目を向ける。そこには、就寝する前に彼自身が作り上げた魔術道具があった。見た目だけならただの一般的な除湿機だが、実際は大気中の魔力素を吸引して、魔力素の濃度を引き下げるという対魔導師道具だ。リンカーコア無しの彼にとって大気中の魔力素を蓄積して魔法を行使することを妨害するのに何のデメリットもない。

まだ、試作品だが改良や量産を重ねれば、AMFほどではないが対魔法兵器として役立つことだろうと密かに期待している。

（とりあえず……もう一回寝るか）

それで体が痛くなって無理に起床することになったのだがお構い無しといわんばかりに布団をかぶる。

それからしばらく目を瞑っていたがすぐに思った。

（眠れない……）

と。

そんなことを考えていると唐突に目覚まし時計の隣に移動させていたデバイスから無線連絡の通信コールがなった。

それを聞くと体の向きを変え、通信を聞く体勢に入る。

まもなく、しわがれているがはっきりと聞き取りやすい男性の声が聞こえてきた。

『本部から捜査員へ、本部から捜査員へ。一旦捜査を打ち切り、今すぐ本部に帰投せよ。繰り返す、一旦――』

そこですぐさまスカリエッティは思考を巡らせる。

（伝達事項なら無線でも伝えられる。それをわざわざ、呼び戻すなんて……『一旦』ということは捜査を打ち切るわけではないはずだ。捜査員全体と一度話しあった方がいいほどの情報を手に入れたのか？ それとも……）

考え続けるが予想は出来ても答えはでない。

本部で話し合うということは無線で情報を手に入れることはできない。伝えた情報を後に無線で聞くかもしれないが極秘情報ならそれはかなわないだろう。

それを踏まえて彼は決めた。

「……寝ーよつと」

考えるだけ無駄なので寝ることにした。

黄金の眠り。

それは若さゆえの特権である。

要するに彼は深い眠りについた。一応、無線連絡を録音するように設定して躊躇なく、眠りについた。

そして、再び体を痛めることになるのは言うまでもない。

＊

「あれ？」

思わず口から声が漏れた。

スカリエッティは体の調子を気にしながら辺りを見回していた。起床した彼はアジト（お世辞にも言い難いが）を出てやたら長い水路を歩き、普段どおり錠前が壊れているマンホールの蓋を開けて、地上に出たわけなのだが外の様子がいつもと違った。

出た場所が裏路地なので最初は気づかなかったが表通りに出ると

異変にすぐさま気づいた。

普段は人や車で賑わっているはずの大通りが人一人いない。常連客で賑わうカフェには飲みかけのコーヒーや倒れたイスがあり、ただならぬ気配を感じさせた。

他にも壊れた看板の時計屋、窓が割れたりひびが入っている本屋、ドアが開きっぱなしの無用人極まりない電器店など日常空間が僅かにだが非日常空間化していた。

乱闘騒ぎでもあったのかと思える光景に彼は何の驚きや衝撃を受けた様子もみせず、まるで今晚のおかず何にしようかなといわんばかりの実質まったく困っていない苦笑いを浮かべていた。

「結界……とかじゃないよね」

誰の返答も聞くことができない疑問を言いながら彼はバッグからデバイスを取り、無線を傍受する。

すると、すぐに音声が届いた。

昨日の無線連絡とまったく同じ声だが昨日とは違い声に明らかな動揺が含まれていた。

「——です！ 繰り返す、犯人は約二十人規模の武装テロリストグループで現在、複数に分かれ街中に潜伏されていると考えられる。住民の避難はほぼ終了して——」

そこまで聞くと無線を切り、思った。

昨日は無線を録音する状態にして寝るんじゃないかってもう少し起きてるべきだったと。

第六話 当然気付かない

「帰ろうかな……」

それが無線傍受後の第一声だった。

少し戻ればマンホールがある。その中に入ってアジトに行けばまず安全だ。

いや、普通に家に帰るべきか。もう三日は空けている。明日は学校だし……

ちよつと考えたが家に帰ろうときびすを返す。

「あつ！君、なんでこんなところにいるの！？」

その先には女性がいた。

服装からして、管理局員……とは言い難いが管理局員だろう。そんな予想を立てると。

「今、ここは危険地帯なんだよ！ 私のような管理局員はともかく君のような民間人がいたらダメだよ！」

人の心読んだんじゃないの？ と言いたくなるような言葉に一瞬驚いたがすぐに言葉を返した。

「すみません。僕、逃げ遅れちゃって……すぐに避難します」

「それならいいんだけど。ここはまだ大丈夫だけど私が安全地帯まで送ろうか？」

「いえ、一人で大丈夫です。逃げる方向はあっちでいいですか？」

正面方向を指差しながらスカリエッティは尋ねる。

このままなら家にすぐ帰宅できるなと思いながら話を進めていた。

しかし、今日は厄日らしかった。

次の瞬間、背中に激しい衝撃が走った。最初は何が起きたか分からなかったが、まるでボディブローを食らったかのような後からじわじわ来る鈍い痛みに自分の身にただならぬことが起きたのが理解できた。

視界に映るのは雲がまばらに散らばっている青空。

自分が仰向けに倒れていると自覚した時には再び景色は変わった。今度は誰かに抱えられ急速に運搬されていた。

状況が飲み込めないスカリエッティは呆然としていたがそのまま状況はさらに変化していった。

爆音が所々から聞こえ、建物が崩れ出す。

「いきなりごめん！でも今は私にしっかり捕まっでいて！」

そんな彼を現実引き戻すかのように近くから先ほど話していた女性の声が聞こえてきた。

よく見れば彼女は自分を抱え、かなりの速度で移動させている張本人だった。

「ど、どうしたんですか!？」

驚いた様子で（内心では平然としているが）話しかけると彼女は早口で状況を説明しだした。

「さっきいた所にテロリストがいたの！　ここから離れないと！」

だから爆発したのかと呑気に思っているとその表情を見て何を心配したのか彼女は優しく話しかけてきた。

「大丈夫、絶対に安全なところまで運ぶから。私の名前はスバル・ナカジマ、君は？」

爆発が止むのを確認すると周りを気にしながら自分の名前を尋ねてきた。

一瞬、戸惑ったが聞かれたからには答えるべきだろうと思い名前を口にした。

「レーノ・スカリエッティです」

それを耳にした瞬間、スバルはふと思った。

（スカリエッティ……偶然か）

それは当然の反応だった。偶然、名字が同じだったと思うしかない。

まさか、かつて戦った犯罪者の実の息子だとは思えないだろう。

同様にスカリエッティも彼女が自分の父親と戦った人物ということには当然気づかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9563z/>

紫の遺伝子

2012年1月13日22時49分発行